

スターリン主義打倒、反スタマルクス主義止揚、革命的マルクス・レーニン主義復権の旗を更に高く掲げ、国際非合法党を建設せよ!

赤報

1979年12月1日発行

共産主義者同盟 (RG)

第31号 200円 発行人 野村 忠

急進民主主義の克服を掲げた急進民主主義

(一) ブンド系諸派の間では、毛沢東思想を受け入れることにより過去の急進民主主義を克服しようとする傾向が生み出されてきた。最近の革命の旗幟の結成もこの傾向に組している。

だがこれまでの経験が教えることは、毛沢東思想でもってブンドの「急進民主主義」を克服したといった事態は起きていない。革命の旗幟の場合も例外ではない。何故なら、こうした傾向はブンド系諸派の急進民主主義が七〇年代階級闘争によってテストされたのと同じように、毛沢東思想もテストされてきたこと、ブンド系諸派に見られる分裂と分散と同様の事態が毛沢東思想をかかえる諸派の間にも存在してきたことを考慮してないからである。

野に与らわれないからである。実際「急進民主主義」を毛沢東思想でもって克服しようといった主張も、実践的に検証された事例として提起されているのではなく、単なる主観的願望として語られているにすぎない。

にもかかわらず、こうした傾向

(二) 革命の旗幟は、一九六九年の第二次ブンド時代に関して「社会主義と労働運動の分離、急進民主主義の同一の土俵の上で、一方の極に赤軍派があり、他方の極に再建派があった」と「革命の旗」(二号)と述べている。両極端はあい通ずるという弁証法の命題を、両派はこの一〇年間の実践で実証したというわけである。だがこの実践は両派にとっては著名なことではない。

一〇年前の第二次ブンド時代における分派間の対立は、軍事組織をめぐって発生し、赤軍派が党の改組をへずに自らの影響下にあり、及び地区反戦の活動家と軍へと編成していったのに対して、再建派(後の再建派)及び再建派が軍を組織することを認め、その

(三) 革命の旗幟の行手には、戦争を内乱に転化することによって語りながら内乱の準備をしながら進んでいくという第一インテリが随分多かった。この背景には、赤軍派の実践における敗北、ゆきまりの原因を路線のせいにして、路線をとりかえ

(四) 九回大会路線が提起している課題は、第二次ブンドの急進民主主義を克服し、革命的マルクス・レーニン主義を復権する党建設を進めてゆくための不可欠の課題なのである。

政治的煽動を党活動の基本的内容とし、全面的政治新聞を手段としたわれわれの党建設は、この要をしっかりとつかんでいる限り必ず勝利する。毛沢東思想支持をかかげた「急進民主主義」保存の試みは拒否されねばならない。

第二次ブンドの急進民主主義は、九回大会路線が提起した課題を避けることによつては克服することのできないということがある。第二次ブンドの急進民主主義の延命をたもたず原因に他ならない。

実践におけるゆきまりは実践の改造による解決されねばならぬ。党活動のゆきまりは党活動の改造による解決されねばならぬ。なぜなら革命的な路線は天から降ってくるわけではなく、党活動のなかで、実践の鉄火のなかで苦闘して作りあげねばならないものであり、実践の改造がまず先行されねばならないからである。

九回大会路線が提起している課題は、第二次ブンドの急進民主主義を克服し、革命的マルクス・レーニン主義を復権する党建設を進めてゆくための不可欠の課題なのである。

政治的煽動を党活動の基本的内容とし、全面的政治新聞を手段としたわれわれの党建設は、この要をしっかりとつかんでいる限り必ず勝利する。毛沢東思想支持をかかげた「急進民主主義」保存の試みは拒否されねばならない。

九回大会路線が提起している課題は、第二次ブンドの急進民主主義を克服し、革命的マルクス・レーニン主義を復権する党建設を進めてゆくための不可欠の課題なのである。

政治的煽動を党活動の基本的内容とし、全面的政治新聞を手段としたわれわれの党建設は、この要をしっかりとつかんでいる限り必ず勝利する。毛沢東思想支持をかかげた「急進民主主義」保存の試みは拒否されねばならない。

九回大会路線が提起している課題は、第二次ブンドの急進民主主義を克服し、革命的マルクス・レーニン主義を復権する党建設を進めてゆくための不可欠の課題なのである。

政治的煽動を党活動の基本的内容とし、全面的政治新聞を手段としたわれわれの党建設は、この要をしっかりとつかんでいる限り必ず勝利する。毛沢東思想支持をかかげた「急進民主主義」保存の試みは拒否されねばならない。

スターリン主義批判

この論文は「共産主義」一八号のために書かれた第一次草稿の一部である。雑誌に掲載する際により、ここに公表する。(編集局)

(一) スターリンの社会主義思想の特徴

スターリンの社会主義思想の特徴は、マルクス主義を哲学体系と見、社会主義をこの哲学体系たる弁証法的唯物論からひとりで引き出されるものとしていっているところにある。その初期の文献である、無政府主義が社会主義か、では彼は次のように述べている。

「マルクス主義はたんに社会主義の理論であるだけではない。それは一つの全二世界観、哲学体系であつて、マルクスのプロレタ

(二) 初期スターリンの弁証法

初期スターリンの弁証法に関する見解の誤りについてとりあげることには当をえていないと考えられるかも知れない。だが後年の著作『弁証法的唯物論と史的唯物論』において、スターリンの弁証法に関する見解の基本的内容は初期のそれとは変わっていない。後期の

この方法を社会に適用し、そこで史的唯物論にも言及した後年の『弁証法的唯物論と史的唯物論』においても前の著作の見地はひきつがれている。というのは後の著作においても彼は弁証法的方法についての考察の後、また唯物論や史的唯物論の説明をしないうちに、必要である。

「社会生活はたえずの運動と発展の状態にあると言われている。それは正しい。つまり、生活は停止しない、停止しただけをあるべきではない、生活はいつか別の水準にとどまるのではなく、永遠の運動、永遠の破壊と創造の過程にあるのである。だから生活はいつも、新しいものと古いもの、成長しつつあるものと滅びゆくもの、革命的なものと反革命的なものが存在している。」(同書五六頁)

スターリンがこう述べたときには、エンゲルスの自然弁証法は出版されていなかったし、またレーニンの「哲学ノート」もまだ書かれてはなかった。彼が参照したのは反デュロワ論であるが、

「反デュロワ論」のどこでもプロレタリアとブルジョアとの対立の関係を求められているわけである。だがエンゲルスは「反デュロワ論」のどこでもプロレタリア

ブルジョアとプロレタリアの対立の関係を矛盾と捉えることは、矛盾の日常的用語法に従って限り許されるものである。だが弁証法的矛盾とは対立物の統一

この生産様式の運動は資本を賃労働に転化させ、賃労働を資本に転化させるというように、この対立物は相互に浸透し、交互作用をなしている。従つてこの資本と賃労働との矛盾は、弁証法的矛盾なのである。資本と賃労働の内的矛盾とする資本制生産様式の運動は、生産の社会的性格と取得の私的性質との間の矛盾を解決することができず、社会主義はこの矛盾の解決としての意義をもっている。エンゲルスは、プロレタリアとブルジョアとの間の対立をこの矛盾のあらわれとして説明しているが、このことは、資本と賃労働という内的な矛盾が外的な運動形態として現れるブルジョアとプロレタリアとの階級闘争において、プロレタリアがブルジョアを打倒することによって資本と賃労働との矛盾が止揚され、かつ生産の社会的性格と取

ではない。
スターリン個人の理論上の欠陥として明らかにすべきことは、彼がマルクス・レーニン主義を継承しておらず、正しい共産主義思想を体得していなかったことである。彼の共産主義思想における誤りや非民主主義的傾向を合理化する原因となっているのである。だからスターリン主義の批判は「自由と民主主義の中心的意義」の解明にあるのではなく、マルクス・レーニン主義の共産主義思想を復権することにある。

(四) スターリンの社会主義思想の批判

(a) 社会主義の叙述とその問題点

スターリンの弁証法が「新しいものと古いもの」との関係に弁証法的矛盾を見いだそうとするものであり、これはマルクス、エンゲルス、レーニンの弁証法的矛盾に関する理論を修正するものにも他ならない。このことが明らかにされた。ではこのようにスターリンの誤った弁証法から「ひとり」にひきだされる「社会主義思想」とは一体どのようなものであろうか。スターリンは「無政府主義が社会主義か」では次のように述べている。

「生活において、誕生し一日と成長しているものを抑えることはできず、その前進運動を停止させることはできない。……ということ、たとえば「社会」生活に、階級としてのプロレタリアートが誕生し、一日と成長しているならば、プロレタリアートが現在どんなにやむを得ず、またどんなに少数であったとしても、結局は、それがやむを得ず勝利をおさめるといふことである。なぜか？ プロレタリアートは成長し、強力になり、前進するからである。反対に、生活において年をとると、墓場への道をたどるものは、現在それがなまはすれて強力であるとしても、かならず敗北をまねかれなければならない。……ということ、たとえば、ブルジョアが崩壊し、よわくなり、年をとると、生活の余計な重荷となりつつあるからである。」(五六―五七頁)

ブルジョアが古い勢力であるのに、プロレタリアートは新しい勢力である。古いものの消滅と新しいものの発展は避けられない、ということが弁証法の法則だから、

義思想を体得していなかったこととあり、彼の共産主義思想における誤りや非民主主義的傾向を合理化する原因となっているのである。だからスターリン主義の批判は「自由と民主主義の中心的意義」の解明にあるのではなく、マルクス・レーニン主義の共産主義思想を復権することにある。

「レーニン主義の弁証法を修正するものであり、かつ事実にも合致しないものだから、これらからスターリンの社会主義思想の三つの内容が崩壊してしまふことになる。……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

(b) 共産主義者の意識性への無理解

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

